

と述べる。再度、三極構造を用いて、今後のスーフィズムの多様な展開の可能性を示唆する。X軸は精神性を深めると同時に諸宗教に通底する普遍的方向へ発展する可能性を示し、Y軸でシャリーアを重視すれば、サラフィー主義のイスラームと通底する。さらに民衆の願望を満たすZ軸も根強いだろうと予測する。スーフィズムにはいくつかの可能性をもつと締め括っている。

最後に、本書で疑問に残った問題について触れておきたい。それは哲学およびギリシャの諸学問をイスラームにおいてどう位置付けているのか、明確でないことである。東長氏はイスラームの学問伝統に言及した際、近現代は「初めてイスラーム学以外の知の体系の持ち主が登場したという意味で、きわめて特異な時代」と記す。だが、アッバース朝初期の古代ギリシャの哲学と自然学の翻訳と受容は、すでにイスラームが一神教と無関係な知の体系を導入したことを意味する。イスラーム神学の成立にもギリシャ哲学は大きな影響を与え、イブン・アラビー哲学にも新プラトン主義の流出論が援用されている。中期スンナ派はスーフィズムを容認したが、哲学およびそれと同類とみなした存在一性論を否定したと東長氏は述べるが、氏はイブン・アラビーを哲学ではなくタサウフだと認めている。実際に、イブン・アラビーはその難解な著作を理解していないであろう民衆や為政者から聖者として尊敬を集め、墓参詣の対象となっている。この点で、明らかにスーフィズムに属する人物である。啓示と理性の対立はヨーロッパでもユダヤ思想でも問題になり、当然イスラームでも両者の関係は重要なのだが、本書ではこの点が奇妙にすり抜けられているようで、より精緻な考察を望みたい。

第二に、スーフィズムを「神秘主義・タリーカ・聖者信仰複合現象」と規定するが、本書ではタリーカの解明がやや物足りない。スーフィズムの三極構造（神秘主義、聖者信仰、道徳）は既述したようにその歴史的変化をうまく説明できる枠組だが、その三極にタリーカが含まれていないことに多少の違和感が残る。タリーカは歴史学で研究されてきたと指摘するが、それらを参照した箇所がほとんどなく、おそらく氏が扱ってきた原典にもタリーカの定義に相当する適切な説明がないのではと推測される。教会制度を創設しなかったイスラームにおいてタリーカがどのような制度でどのように機能したのか、他宗教でいえばどのような制度に相当するのかなど、宗教学の立場からは知りたい問題である。

宗教学の立場からは、本書は興味深い事例に満ちている。仏教民俗に詳しかった五来重がヨーロッパを旅した折に、教義ではなく現世利益の民間信仰にこそ宗教の普遍性が見られると言ったが、本書で説明されたイスラームの聖者信仰のもつ宗教性の解明にはイスラーム以外の諸宗教との比較の視点を取り入れると有効なのではないかと思われる。

（小田 淑子 関西大学文学部教授）

中西竜也『中華と対話するイスラーム——17-19世紀中国ムスリムの思想的営為』（プリミエ・コレクション 37）京都大学学術出版会 2013年 xxvi+426頁

中西竜也氏の『中華と対話するイスラーム』を読み、さまざまなことを思った。以下に記すことはこの本についての私的な所感である。1945年に日本軍国主義が連合国軍に敗北するまで、日本では中国イスラームについての研究が盛んに行われていた。それは日本の軍国主義者たちが共產主義勢力の伸長をふせぎながら中国大陆の中に自らの勢力圏を確立するために、いわゆる「回教徒」

を利用しようという目的があったためである。したがって1945年までの中国イスラームの研究は政策科学、あるいは国策の一部としての研究の一つであったということができよう。岩村忍、佐口透、田坂興道などの研究者が中国イスラームの研究に従事した。フィールド・ワークを行う際には中国駐留の日本軍の支援もあった。これらの人々は戦争が敗戦に終わったあとに戦時中の調査研究成果を整理して刊行した。そういう研究の中には今日の研究水準からみてもレベルの高いものがある。岩村忍の中国イスラーム礼拝堂の石碑の碑文の研究(『中国回教社会の構造』日本評論社刊、昭和25年)などは文化大革命期の宗教関連文物の徹底的破壊を考えれば貴重な資料を後世に伝えることになったという思いがけない結果をもたらしている。また田坂興道の『中国における回教の伝来とその弘通』(東洋文庫、1964年)も戦前の中国イスラーム研究成果の戦後期における発表のひとつである。一方、中国「回教徒」の研究に従事していたが、戦争が敗戦に終わると竹内好のように回教研究とすっぱりと縁を切り、別な分野に研究領域を変え大きな業績をあげた人もいる。共産党政権成立後、中国共産主義革命について多くの論文、訳書を発表した野原四郎もまた戦前に中国回教研究に従事した一人である。

かくして日本における中国イスラーム研究は戦前・終戦直後にかけて隆盛を見たのであるが、これらの研究は前述のように日本軍国主義に支えられて行われたものである。地域研究なるものは植民地主義、帝国主義と密接な関係をもちながら発展してきた歴史を持っている。岩村忍、田坂興道などの研究そのものが植民地主義、帝国主義的であるとはいえないであろう。これら研究者たちが強い学問的情熱に基づいて研究活動に従事していたであろうことは想像にかたくない。しかしながら、これらの人々の研究が帝国主義、軍国主義の時代の制約を受けていることもまた否めない。日本の帝国主義、軍国主義が様々な非人道的な犯罪を引き起こしてきたことは否定できない。いわゆる日本軍の「対回工作」の後遺症が共産党支配体制下の中国のムスリムに影を投げかけ、政治運動が起こるたびにムスリムのなかから新たな犠牲者を出し続けたことは否定できない。知り合いの回族の老人は、その出自の故に反右派闘争の時に「牛鬼蛇神」と決めつけられ牢獄に一年ほど繋がれた。出獄後もこの人はいつまた自分が批判の標的になるのではないかとおどおどしながら生活をせざるをえなかったので心臓が悪くなったという。1949年に共産党が政権をとったが、その前の国民党時代は「大漢族主義」が横行していた。ムスリムは宗教性が否定され漢民族あつかいされ自分たちの宗教的アイデンティティを否定され、宗教活動が制限された。山東省石家村清真寺の故楊宝泉阿訇は中国のムスリムにとっては日本軍占領時代が自分たちにとっては一番平和な時代だったという逆説的な証言を残している。ともかく歴史を通じて日本国籍を有する人間が中国イスラームについて調査・研究を行う場合には細心の注意を要する。研究者が意図しない副作用を研究対象となる人々にもたらすことがあるからである。

ここ十年ほど、中国イスラームが日本では研究対象として再び脚光をあびてきている。これにはなにか隠された政治的意図がどこかで働いているのかもしれないが、中西竜也氏の『中華と対話するイスラーム』についてみる限りそのような心配はないように思える。著者の純粋な学問的好奇心が旺盛に活動するような主題について考究がなされている。取り上げられる主題は主として雲南、陝西、青海、甘粛省などにおける清代から民国期にかけての項目が多い。こういう抑制された研究であれば現地の人々に迷惑をかけることもないであろう。

ところで、この著作の題名は『中華と対話するイスラーム』となっている。これは杜維明とサイイド・ホセイン・ナスルがここ10年以上にわたって主催する儒教とイスラームの文明間対話を彷彿させる題名である。杜とナスルの主催する文明間対話は中国文明とイスラーム文明の相互理解を

進める目的でさまざまな討論がなされている。しかし、中西竜也氏の作品は中華とイスラームが相互理解を進めるためのものとは思えない。第7章の「スーフィズムとタオイズム」は井筒俊彦の“Sufism and Taoism”を思い浮かべてしまう命名であるが、井筒の場合は思索と認識の構造が究極的には同一の形式をとるということを証明して対話の可能性を確立した著作である。それに対して、第7章「スーフィズムとタオイズム」はスーフィズム文献と道教文献に見える語彙のパラレリズムを分析しただけのものである。さらに研究を進めてもらいたい主題のひとつである。

ともかく中西竜也の研究は広大な中国大陸の奥地に点在するイスラーム教徒の共同体の中で、かろうじて命脈を保っているスーフィー的イスラーム文化をピックアップして念入りに分析したものである。その意味では労作であると評価できる。しかしながらこの作品のなかで取り上げられた諸主題が、おおきなパースペクティブで捉えられた中国イスラームのなかでどのように位置づけられるのかが今一つ見えてこない。著者の今後の研究に大いに期待したい。

(松本 耿郎 聖トマス大学人間文化共生学部教授)

山尾大『紛争と国家建設——戦後イラクの再建をめぐるポリティクス』明石書店 2013年 298頁

2003年の米軍による侵攻作戦以降、イラクはめまぐるしく変化してきた。反米闘争からシーア派イスラーム主義勢力の伸張へ、内戦状態から国民統合の主張へと政治情勢は揺れ動き、世界的にきわめて注目された武力紛争経験国でありながら、戦後イラクの政治過程は専門家以外にはなかなか理解しづらい。こうした状況の中、本書の刊行は大きな意義を持っている。米軍による侵攻直後から完全撤退後の2012年までを視野に入れ、戦争によってサッダーム・フセイン体制が破壊された後にどのような政治体制が立ち現れたのかを、一次資料を駆使しつつ、きわめて詳細かつ説得的に描き出した本書は、イラク研究の水準を引き上げるだけでなく、他地域・他分野を専門とする研究者との対話を促し、研究の裾野を広げるであろう。

本書の優れた点は、政治過程の分析でありながら、これを単にクロノロジカルに描くのではなく、「国家建設」の観点から多面的な分析を加えていることである。政治学の基本概念を用いて、紛争後の政治過程を民主化(第二章)、政党政治(第三章)、選挙(第四章)、治安機構の確立(第五章)、財政(第六章)というトピックに整理し、それぞれ詳細な議論が進められている。分析に関して特に評価したいのは、イラクの国内アクターに注目し、彼らがいかに主体的に行動し、自己の利益を政治秩序に反映させていったのかという視角が本書全体を貫いている点である。この視角を共有することで、読者は戦後イラクの政治過程を諸アクターの合理的な行動の結果として理解できる。それは、本書の記述をきわめて明快にしている。

評者はアフリカ政治研究を専門としており、戦後イラクの政治過程について本書の分析から多くを学ばせてもらった。こうした良質の現状分析は地域研究の存在意義を明確に示すものである。本書に対して、多くの賛辞が寄せられることだろう。ここではこれ以上賞賛を重ねることはせず、むしろ評者が感じた疑問を述べておきたい。それが優れた研究書に接したときの、書評者の責務だと考えるからである。

明快な本書の分析を読みつつ評者が抱いた疑問は二つに集約される。第一に、国家建設の評価に関わる点である。結論部分で筆者は、戦後イラクの国家建設を否定的に評価し、戦後イラクに外部